# 論説　年頭所感

第55代会長　石原藤次郎*

会員の皆様，新年おめでとうございます。ここに，所感の一端を述べて，新年のご挨拶といたします。

本年は8月31日から9月5日まで，京都国際会議場において，第13回国際水理学会議（The XIII th Congress of IAHR）が開催されます。7月12日から19日まで，同じく京都国際会議場で開催される国際溶接学会第22回年次大会(22 nd Annual Assembly of IIW)とともに，工学関係では日本学術会議主催の最初の国際会議であって，ともに土木学会と非常に関係が深く，国内はもとより国際的にも，学問的水準が高く評価されたものとしてまことに喜ばしい次第であります。土木学会を始め関係学協会の全面的協力を得て，学術の国際交流に大いに役立つことを念願しています。

わが国の最近の経済発展は誠に目覚ましく，世界の注目を集めていますが，その基盤の1つとして，土木関係の科学技術は公共事業の飛躍的増強と相まって，いよいよ進歩して内外に誇るべきものが少なくないようであります。上記の水理学や溶接工学の進歩はもちろん，地震工学において世界の指導的役割を果たしていますことは，よくご存じのとおりであります。さらに，全国各地で数多くの経験をつんだダム築造技術，国鉄新幹線にみられる鉄道の画期的近代化，幾多の悪条件を克服して強力に進められている地下鉄工事，埋立港湾・掘込港湾と臨海工業地帯の造成など，見るべきものが少なくありません。こうした個々の科学技術をいっそう深く掘り下げ，それらの谷間を埋め，他分野の基礎知識を広く導入し，境界領域の開発に務めることによって，ますます独自のものをつくりあげていかなければなりませんが，最近の国土の急激な変貌，それをめぐる環境の変化を考えますと，土木関係の科学技術の内容・役割・方法などについて，さまざまな問題が，生れてきているといわねばなりません。現に土木関係の業務が大きく変化し，会員の職務別構成が従来とかなり変わっているようであります。われわれ土木技術者は，これらの問題を共通の場で受け止め，土木界の置かれた位置，あるべき姿を真剣に考え，それに対処しなければなりません。

こうした意味で，昨年1月の学会誌で，総合と分化の立場から，土木界の動向をさぐる特集が行なわれたことは，まことに注目すべきことでありますが，学会理事会では大学土木教育委員会からの問題提起を契機として，土木界の将来のあり方について慎重な検討を重ね，近く特別の委員会を設けて，この問題に本格的に取り組むことになりました。学生会員を含めた若い技術者の積極的な協力を求めて，魅力のある土木界の将来のイメージをつくっていただきたいと思います。

この場合，まず問題になるのは，自然を克服するための従来の土木技術を，人間の幸福，社会の福祉増進のための土木技術へと，大きく転換することであります。常に新しい価値観によって統御され，人文・社会科学をも含めた総合統一された基盤の上にたった土木技術でなければなりません。こうして絶えず目的が意識され，合目的的に合理性をもって貫かれることによって，新たな土木技術が体系化されるはずであります。一方，総合技術としての土木技術の展開にまつものが，少なくありません。国土の保全と総合開発，都市の再開発，原子力発電，公害対策，海洋開発，海水の淡水化などの問題に，電子計算機を縦横に駆使して組織工学的に取り組むことによって，土木界の将来が大きく方向づけられ，その活動分野をますます広げてゆくものと思われます。

こうした土木界自体の最近の変貌に即応して，土木学会としても考えるべき点が少なくありません。会員各位から自由に意見をよせていただき，関係委員会の検討をお願いし，理事会の議を経て逐次実行してゆくつもりですが，現在具体化しようとしている論文集について，少し触れておきたいと思います。論文集は専門学術の進展を目指して，審査・編集などの方法を改め，ページ数を増すことになるようですが，投稿から刊行までの時間がかなり短縮されるだろうと期待しています。学会誌については，総合的な科学技術としての土木の発展に重点をおき，関係学協会との協同研究や情報交換，関係方面との研究開発上の協力，国際的な学術交流，技術者の地位向上などに努めるよう，希望が寄せられています。また最近の大学紛争は大きい関心事であり，正しい大学のあり方が確立されることを念願してやみませんが，土木界の変貌と将来のあり方にに関連して，大学教育の内容についても問題は少なくありません。各員各位の意見にもとづいて，教育内容が具体的に論議され，まとまった見解を打ち出すことができればと思います。これらは問題の一端を述べたにすぎませんが，土木学会としてなすべき多くの問題について，会員各位のいっそうのご協力を重ねてお願いし，ご挨拶といたします。

* 正会員　工博　京都大学教授 工学部土木工学科